井上上196字　みんしん 民心 元2140字 人民の心 人民を治める　墓むる1190字　2,738字　治めることの反19行　南2707字-3/5 12行　南2707字-1/5 15・16行　南2728字に、南2773字-2/2 先に出Nたように、

天忍穂耳尊（末代の応神天皇）の降臨

■すでに述べたが、

①中国（拘奴国）を平定した後、吉備国の中山の西麓に茅葺宮を作って■住んだ皇子伊佐勢理毘古（大吉備津彦）は、吉備国を中心とする一帯の統治を行った。

②皇子伊佐勢理毘古は、後年襲名して、応神天皇の名と位と歳とを受け継いだ、

と想察される。

■とはいえ、この新たな応神天皇（高皇産霊尊）は、

「（これまで通り）伊邪国（宇佐国）に都を置いていてはならない。東方の地域（中国地方・近畿地方）は、今もなお混乱状態にあって、民心が荒んでいる。

私は、日辺の国（近畿地方）へ都を遷し、人民を治めることにしたい」

とお考えになったのであろう。

天口ワ1126字 末の世　初代

コクヨ ケ-20 20×20

「よう」の反4行

580

南コクヨ-3/5 12行

祝福 1061P 南2839 ニニギへ　紀上152P　市杵島姫 ⓣ 2512P　2,739P　大カンワ2084 設 ヨウ セチ　大カンワ2589 斎 ヨウ サイ　紀上134P 〃 152P　紀上152, 134P　高皇産霊尊 ⓣ 2517 ⓣ 2518　5/5

ここに、高皇産霊尊（応神天皇）は、天兒屋命は、神事を主る宗源者なのだから、太占の卜事を以て仕え奉らせるべきにしようと思いになった。

ここに、高皇産霊尊は勅し「私は、天津神籬（神の降臨する場所）と天津磐境（その神をまつる司祭者の座所）を設け作って、私の子孫のために浄め斎おう。おまえたち、天兒屋命と太玉命とは、この天津神籬を奉持して、葦原中国へ降り、私の子孫の為に設斎して奉仕せよ」と仰せになった。

そして高皇産霊尊（応神天皇）は、天兒屋命と太玉命の二人を使わし、天忍穂耳尊（応神天皇御自身）に陪従えて降された。

是の時、天照大神（市杵島姫）は、御手に宝鏡「八咫鏡」をお持ちになり「天忍穂耳尊（応神天皇）に授けて祝福され「吾が兒よ。この鏡を視ることを當一く

H4.5.7(土)
H11.2.6(土)

明宮 元(馬)183ᵖ 紀上380ᵖ 南2793ᵖ-3/3 南2803ᵖ-3/3 2,740ᵖ

紀上152ᵖ 南2717ᵖ-1/2 参照

前頁13行 井上(上)144ᵖ未 紀上152ᵖ

私を視るのと同じに考えよ。この鏡と殿を共にしく床を同じくして、みづからを斉め斎う鏡とせよ」と仰せられた。

こうして、天忍穂耳尊（末代の応神天皇）は、――葦原中国（旧拘奴国の東の旧母国（近畿地方））へと降ってゆかれた。

応神天皇は、軽島の明宮（奈良県橿原市大軽町、畝傍山東南の地という）に坐して、天下を治められた。（応神記冒頭。応神紀四十一年二月十五日条参照）

コクヨ ケ-20 20×20

紀上380 近2
記(図)183

「明宮」前夜に詳述

2741

おごそ 厳か(に)
つが多い

「明宮」の東北方には、望むと、ひときわ秀麗な三輪山が聳えており、その頂上から黒煙がゆったりと天に大空へ立ち昇っていた。

かつて、応神天皇は、東国の「伊邪国」(宇佐国)に都を置いて倭国を統治されたが、……今、末代の応神天皇は、東の国「日辺国」(日辺日本国)の中心というべき所に都を遷して全領域を支配されるのだった。

応神天皇は煙を棚引かせている三輪山の

九州山脈の東側

大和国

奈良盆地内の「明宮」を都と定め、

敗戦に打ち拉がれ、望みをなくしてしまっている人々の心の内に、天上の国に御座す天照大神の徳を及ぼそうと務められた。

すなわち、「天上の国の「天照大神」の威光は、東の「日辺国」「日辺日本国」の津津浦浦にまでも輝き渡ることとなった。

こと

コクヨ ケ-20 20×20

H30(2018)7.8(月)～7.9(4回)
H31(2019)2.11(月)～2.12(3回)

下 2/12
2/12

2,742P

㊤2896P－2/2
㊦2795Pに詳しい

人心を一新する
元132P

一新 いっしん すっかり改めて新しくする

■尚、倭国の王が自ら率先して地上の国へ天降られたのだから、――随従した■の者達の数も非常に多かったであろう。

↑↑↑と想到される。

そして、九州から日辺の国へと移り住んだ人々は、

《故郷の倭国の地形と、その新天地の地形とが、瓜二つと言えるほど極めてよく似ている》

ということに、驚きを禁じ得なかったであろう、と推察される。（第18・19図参照）

＊

コクヨ ケ－20 20×20

新 p-134～5 頁 584

出雲国

それでは、国譲りして去っていった大己貴達の方に目を転じ「――その苦難の国生みの歴史を見てみることにしよう。

素戔嗚を始祖とする代々の祖先達が築きあげてきた母国（近畿地方）を、いわば力尽で皇孫に譲らされた大己貴やその子等は、てんでに、新しい国（つまり現在の出雲国）を目指した。

大国主には、兄弟八十神（大勢の兄弟）があった。＊幾代もの大己貴には、合計八十神もの子があった、の意であろうか。

多の八十神たちは、やがて因幡国の八上媛をめぐって競いあうことになるのだが、――しかし今は、そのような先の結果など知るよしもなく、新しい自分達の国「出雲国」を指して、ひたすら歩いた。

みんなは、大国主に大きな袋を負せて、従者として連れていった。

大国主が因幡の気多之前（鳥取市白兎海岸に気多岬という伝説地がある）という所へやってきたとき、そこには、先を行く兄達に苛められ傷つけられた赤裸の男がいて、泣きながら苦しそうに伏せっていた。

ここのみ「素」記(呂)60P　記(楽)226　素 紀(神)1279　2,744 P 1/4　記(呂)60　蒲 紀449　鈴木重古34　菟 紀下396　12行 (国)400 3P 紀下194　記(呂)58　(楽)原文「菟」226

■それは、「菟」という名の男だった。

＊なお、参考迄に述べると、

●推古紀十八年十月九日条に、土部連菟

●天武紀元年の壬申乱条に、置始連菟

などとある。

＊その昔、「菟」という名は珍しくなかったのであろう。

■菟の話を聞いた大国主は、哀れに思い、

「それでは早く、あの河口へ行って真水でからだ全体をよく洗い、水辺に生えている蒲黄（蒲の上端にある雄花の花粉が黄色いので蒲黄と書く。止血剤として用いられた）を敷き散らし、その上に寝ころんでいてごらん。そうすれば、必ず本の膚のもとどおりになるから」と教えてやった。（写真図版466〈蒲〉参照）

■その教えのとおりにすると、菟の身は元へ戻った。

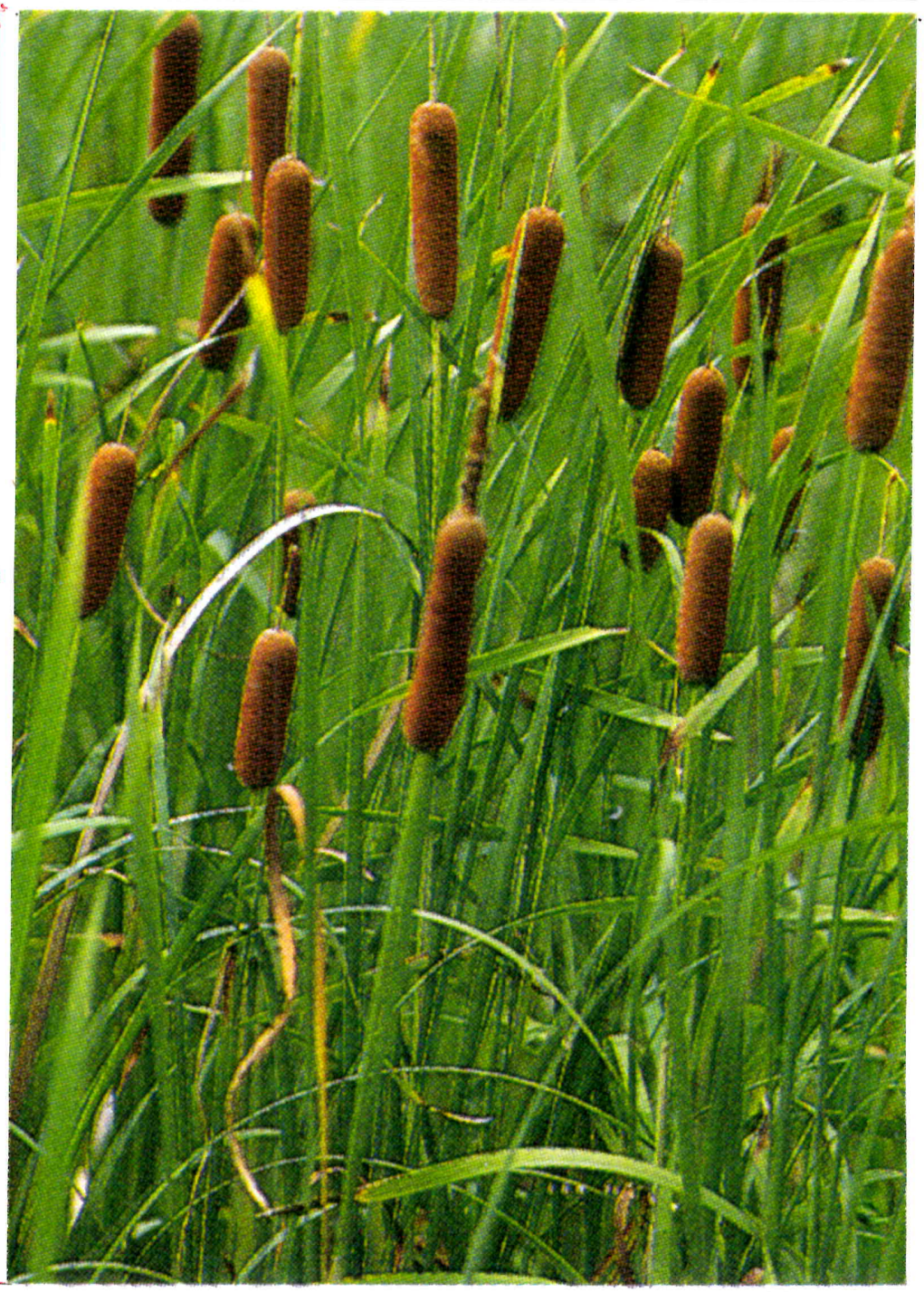
■ここに、「稲羽」の「素」（物事のもと、元素）「菟」、――「稲羽の祖」である「菟」、――元素菟（記）は、大国主に申し上げ

＊なお、「因幡」（鳥取県東部）は、大和国から出雲国へ行く途中にある。

コクヨ　ケ-20　20×20

・カラー
・明るくしておいて下さい。
・頁の右上に配置して下さい。
・限度一杯右と上へはみだして下さい。
・AとBを同一寸法にしておいて下さい。

2,744P－2/4



587

左右の写真 中心ふりわけ 14QG

左写真の中心ふりわけ

写真図版 466 蒲（ガマ科の多年草）

11QG 右づめ 蒲の穂

『茶花の野草大図鑑』世界文化社、2008年10月5日発行、324頁参照

12QG

・茎の先に長い花穂（穂）をつける。上端の細くて黄色い部分が雄花穂（蒲黄）で、長さ6～12cm。その下の太い部分は雌花穂で、長さ15～20cm。

・初夏の花期に雄花穂の花粉を採取・乾燥させた蒲黄が、切傷、火傷に効能がある。

・秋に、雌花穂は綿毛となり、風に散るが、穂綿となって冬まで残るものもある。

・カラー

・頁の左上。

・限度一杯 上と左へ
はみ出して下さい。

適宜カットして下さい。

B

1194 蒲の穂綿
がま ほわた
左づめ

2.744P-3/4

588

いなばの
稲羽之八上比売 記(岩)226p 記(岩)58p 7行

2,744p − 4/4

次頁から

「あんなにもお人の悪い八十神たちに、この稲羽之八上比賣(いなばのやかみひめ)をやるわけには参りません。

あなたは袋などを背負って、お供について(ふくろ)(せお)(とも)いらっしゃいますけれども、出雲国の王位にお即きになるのはきっとあなた様でございましょう。

どうか、12.5cm私の娘(むすめ)八上比売(やかみひめ)をもらって下さい」

と言った。

589 媛(ひめ) 2タイ3 11行
壽 この頁 2行

前頁へ

■また、八上比売は八十神に答えて、

「私はあなたがたの言いなりにはなりません。私は大国主命に嫁ぎたいのです」

と言った。

＊なおこの後、大国主命が出雲国の王となったとき、約束どおり八上比売は美刀（陰部）をお与えになって結婚されることになる。

＊そして、稲羽の素兎（祖兎）は、いつの頃からか、菟神と呼ばれるようになった。

ところで、『古事記』では「しろ」は「白」の字を用いるのが常であり、この『稲羽之素兎』という箇所のみ「素」の字を用いている。（「古事記」新潮日本古典集成、六。頁注六）

■本来は、『稲羽の素（祖）の兎』の意味であったろうと解してみたい。

■もっとも、『稲羽之祖兎』と書いたのでは物語としての面白さに欠ける。

■『古事記』の編纂者は、

〈後代の読者が、「素兎」を「白兎」のこと

と理解したとしても、――――それはそれ、

全く筆者のあずかり知らぬこと≫

とばかりに、あえて「稲羽え素菟」と書き、

「稲羽の白菟」とも「稲羽の祖菟」とも解釈

できるように工夫を凝らしたのであろうと

推察される。

娘の「八上比売」が人間の女性なのだから、

その父親は当然「人間」だと解される。

稲羽の八上比売にきっぱり拒絶された八十神たちは、大いに怒り、大国主を殺そうと議った。

大国主は、八十神たちに迫害され、幾度となく死ぬような目に遭いながらも、ようやくのことで、須佐之男命の「御所」へやってきた。

＊ここのところ＊

記(巡)87ページ、注13　　2,746ページ－2/2　「島根」和名抄487ページ　九土記にもある　根堅州国　記(巡)44ページ注7　元798ページ　御所＝座所　逸速く　元125ページ

〈逸速く、□の新しい出雲国に移り住んだ大己貴が、祖先神である須佐之男命を祀っている。□御座所□□すなわち、根（島根）の堅州国（堅い州の国）の須佐之男命の□御所に、大国主がたどり着いた〉

ということを意味しているのであろう、と思われる。（記参照）

＊まーかーしたら、〈このの□須佐之男命の御所□とは、出雲国の多芸志の小浜（一説に、出雲大社の現在地より東ハ□キロ　今の出雲市武志町）に造営されたという□天の御舎□（神殿）のことだろうか〉

などと想像されるが、定かでない。

＊なお、神代記〈大国主神の国譲り〉条に、「出雲国の多芸志の小浜に、天の御舎を造りて、云々」と記されている。

＊

コクヨ　ケ－20　20×20

色許男 記(黒)63字　試す 云1400字　己 云317字　記(白)62字 (茶)227 原文

2,747字

■大国主は、この根堅州国の其大神（須佐之男命の末裔、大己貴）の其女須勢理毘売と情を通じて結婚した。

■須勢理毘売は、家へ還り入ると、其父にこう言った。

「とても麗しい方がおいでになりました」

■ここに、其大神は、出て見て言った。

「なんだ、葦原色許男（葦原醜男）ではないか」

■そして何と、根堅州国においても、数々の試練が大国主を待ちうけていた。

■其大神（大己貴）は、大国主が己の娘須勢理毘売の夫として相応しいかどうかを試してみよう、とお思いになったのだった。

■其大神が大国主に課す難題は、言語に絶するばかりに激しく、容赦のないものであった。

■色許男を、蛇の室に寝かせ、そして来日

前頁4行

の夜には呉公と蜂との室に入れられた。

■また、鴟鍋（飛ぶとき風を切って鳴るように、蕪型の矢じりの中をくり抜いて作った矢）を、大野の中へ射入れ、――――――其矢を色許男が採りに行っている時、まわりに火を放った。其矢を

■この際には、さすがの色許男も、あやうく命を落すところであった。（神代記参照）

＊

■さて、丁度そのころ、其大神（大己貴）は亡くなってしまったのであろう。

■「古事記」には、こう記されている。

「於是其妻須世理毘賣者、持喪具、而哭來。其父大神者、思已死訖、出立其野。爾持其矢以奉元時、幸入家而、喚入八田間大室而、令取其頭元風。」

とある。

■次のように解釈してみたい。

突然にも

かばね
屍 444P

2,748P − 2/2

(周)尺 = 22.5センチ (面)1479P
石室「装飾古墳の秘密」28P

祀(墓)64P
い(墓)228P (墓)2822P

13.5 9M

（是において、色許男の妻須世理毗売は、喪具（葬式用の道具）を持って、哭きながら来た。

其の父（須世理毗売の父）の大神（大己貴）の霊魂は、12.5 9M 己が己に、飲と死人と思いで訪った。

其の野に出で立たれた。

爾して、色許男が其の矢を持って奉りし時、12.5 9M 其の大神は色許男を、死後の家に入れ、（宅。つまり自らの墓）の中へ連れて入り、八田間（八尺間の略。八尺＝八×二二・五センチ）の大室（横穴式石室の内奥の室）に喚び入れると、其の（自分の）頭の虱を取るように命じた。

と理解される。

尚、宅という字には、「家」「住まい」「墓」「墓穴」という意味があるという。

（「明解漢和辞典」長澤規矩也、三省堂）

（定）参照）

恐らく、古代においては、死後に屍が葬られて、長い時を過すことになる。古墳の石室は、――宅、つ

によりつ 元1707P 如実 そのままに

なまがら 元 亡骸1652P

2,749P

天の御舎 ㊐2746P-1/2

解釈 ㊐2748P-1/2 20年

まり「死んだ後の家」と考えられていたのだろう〉と推察される。

■なっとも、こうなことを述べると、――従来の解説とはあまりにも異なるので、奇妙な感じをいだかれるに相違ない。

●しかし、以下に続く文は〈「天の御舎」（神殿）の殿舎内の様子を語ったものではなくて〉「横穴式古墳」内の状況を物語っているように思われる。

●つまり〈須世理毗売の父の大神（大己貴）の亡骸が『横穴式古墳』最奥の石室内に安置されたことを示唆している〉と解される。

●屍を横穴式石室内に葬る際の「風習」や、古代の人々の「考え方」などが如実に示されている、と見るべきであろう。

*

コクヨ ケ-20 20×20

記(漢)228P
(仮)64P

2,750P

滕戸記(漢)26P
記(仮)64P

■色許男は、暗い大室（石室）の内に横たわる其大神に命じられたとおり、丸を取ろうとして、其頭をよく見た。

■すると、何と、そこには■吳公がたくさんいるではないか。

■ここに、色許男の妻須世理毘売は、椋の木の実と赤土とを取って、其の夫に手わたした。

■色許男は、其の木の実をバリバリと咋い破り、そして赤土を口に含んで吐き出した。

■其大神（大己貴）は、色許男が吳公を咋い破り、吐き出していると考え、心の内にいとしく思って、寝ておしまいになった。

■そこで色許男は、其神の髪を握り、其の室の椽ごとに結い著けて、五百引きの石を其の室の戸（神代記、黄泉国条に「殿の滕戸」とある）に取り塞へた（ふさいだ）。

■色許男は其妻須世理毘売を背負うやいなや、其大神の生大刀と生弓矢（生は活力がある意

コクヨ ケ-90 20×20

懐妊の試 黄泉比良坂 ㊥2207P 2226P ㊦2226P

2,751P

大走ぎで 石障「黄泉比良坂の秘密」28P 記(四)64P (第)228P

の美称。生大刀と生弓矢は軍事的政治的支配権の象徴）と、また天の沼琴（立派な玉飾りのある琴。宗教的支配権の象徴）を取り持って、あたふたと逃げ出した。

■ところが、逃げ出す時、其の天の詔琴が樹に拂れて、地動み鳴動した。

■寝ていた大神は、その音を聞くと驚いて目をさまし、起き上りざま、その室（石障か）を引き仆してしまわれた。

■しかし、大神が椽に結えつけられた髪をほどいておられる間に、しこを色許男は遠くへと逃げていった。

■大神は、急いで髪を解き放つと、色許男のあとを追ってゆき、黄泉比良坂で追いついた。

■尚、黄泉比良坂は、母の姿をした高塚の女陰部（横穴）の出口のことなのであろうと思われる。（第三十四章〈懐妊の儀式〉の項において既述）

■とはいえ、この黄泉比良坂（澤のまわ

地名辞146「イヅモノミサキヤマ」＝[illegible]山・鼻高山　紀上326　風土記503　元(黒)65　元(黒)58,65　(青)228

(青)2753-3/2　(青)2753-3/2　2,752

りの土手）は、黄泉国と、現世との境界をなしており、――死者である大神は、もはやそれ以上、色許男を追ってゆけ[illegible]とができなかった。

そこで、其の大神（大己貴）は、はるかに色許男に呼びかけ、大声でこう言った。

「お前が持っている其の生大刀・生弓矢をもって、汝の庶兄弟を、山坂の裾に追い伏せ、また河の瀬に追い払い、おのれが大国主神となり、また宇都志国玉神となって、其の我が女、須世理毘売を婚妻（正妻）とし、宇迦の山（出雲大社の東北にある御埼山の別名を宇賀山という）の麓に、底つ石根に宮柱ふとしり（しっかりと立て）、高天の原に氷椽たかしりて（空中に千木を高くあげて）住め。是の奴め」

色許男は、其の大刀・弓を手に持ち、八十神を追いしりぞけ、山坂の裾ごとに追い伏せ、河の瀬ごとに追い払った。

こうしてついに、大国主命は、この地に始

(青)2753-3/2 13行　599

古朝、千木は無かった

めて国「出雲国」を作ったのだった。（神代記参照）

＊

なお、あえて述べると、

〈大己貴命の名がこの時に絶えてしまったというわけではなく、――素戔嗚尊の子の六世の孫である「大己貴命」は、難波あたりに居住したのであろう〉

と、定かならぬ事ながら想像される。（神代紀上第八段一書第二参照。追って述べたい）

＊

須佐之男命の子孫であり、しかも「天之冬衣」（天之葺根）の子として生れた「大国主命」は、――大倭国のお覚えもめでたく、新しい出雲国の王として正式に認可された。

とトルとなった。

尚、神代記、〈須佐之男命の子孫〉条に、

「天之冬衣の神。この神、刺国大の神の女。名は刺国若比売を娶りて生みたまへる子、大国主の神。亦の名は大穴牟遅の神といひ、亦

の名は葦原の色許男の神といひ、亦の名は八千矛の神といひ、亦の名は宇都志国玉の神といひ、并せて五つの名あり」

と記されている。（第三十九章〈大己貴〉の項において既述）

■そして、高皇産霊尊（応神天皇）の勅許を得て、大国主命が新たな出雲国に創建した宮殿（天日隅宮）（現在の出雲大社のことであろうという）は、――――――――宇迦の山（御埼山）の山本（麓）に、底つ石根に宮柱ふとしり、ひときわ高く、天を突くばかりに聳え立った。（記。紀。「出雲大社」千家尊統、学生社、一三八頁参照）

■すっとも、出雲大社創建当初には未だ、氷椽（千木）および堅魚木を屋根に取り付けていなかったのではなかろうか。

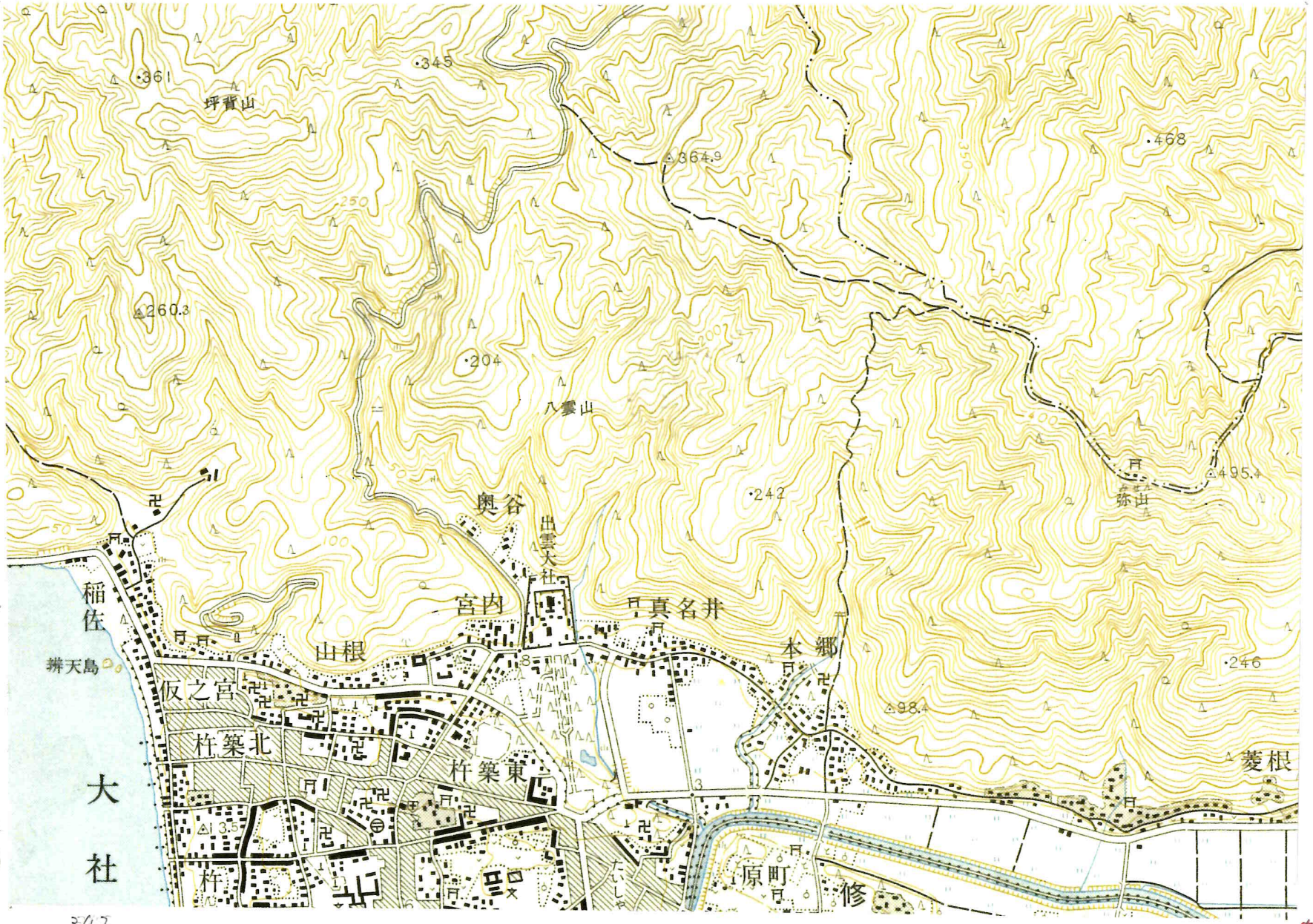
■千木および堅魚木を上げて、出雲大社を天皇の御舎の如く改修するのは、実は、ずっと後のことであろうと思われる。

■詳しくは、第四十五章「出雲大社の変遷」の項において述べたい。

2,753P-3/3

拡大図 P
⑤1517-3/6
⑥2786P
拡大図

・カラー
・右頁の上半分に限度一杯はみ出して掲載下さい。



イナサ
⑥2768P
一/6行

さんみ
山彙
ヤセンワ669P
山岳の集まりをいう。

第342図 出雲大社近傍図（昭和52年3月30日付、国土地理院発行の25,000分之1地図「大社」参照）

＊「出雲御崎山は、出雲半島西部に在る山彙（山々）、その高峯を弥山および鼻高山という。出雲大社の東に聳ゆ」という。（「帝国地名辞典」太田為三郎、名著出版、昭和49年10月23日発行、146頁〈出雲御崎山〉参照）

602P